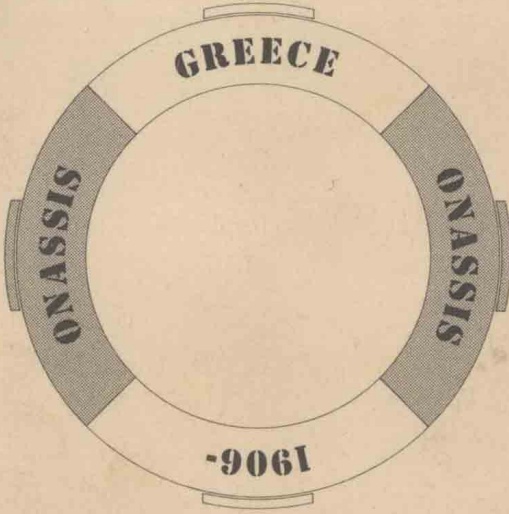


ONASSIS



オナシス

七つの海の挑戦者



ダイヤモンド社
W フライシャワー 著
新庄哲夫 訳

訳者略歴

新 庄 哲 夫

1921年サンフランシスコ生れ。青山学院英文科卒業。東京新聞編集委員を経て現在は英米文学およびノンフィクションの翻訳を紹介。

ノンフィクションの主訳書：『チャーチル』（L・モーラン・河出書房），『ロバート・F・ケネディ』（R・トレダーノ・早川書房），『スターリンとの対話』（M・フラス・雪華社），『戦車の下の実相』（C・チャップマン・集英社），『処刑された被害者』（L・ケネディ・新潮社）。

オナシス——七つの海の挑戦者——

昭和44年12月4日 初版発行

昭和47年7月20日 2版発行

著 者 W・フラインャワー

訳 者 新 庄 哲 夫

© 1969 Tetsuo Shinjo

発行所 ダイヤモンド社

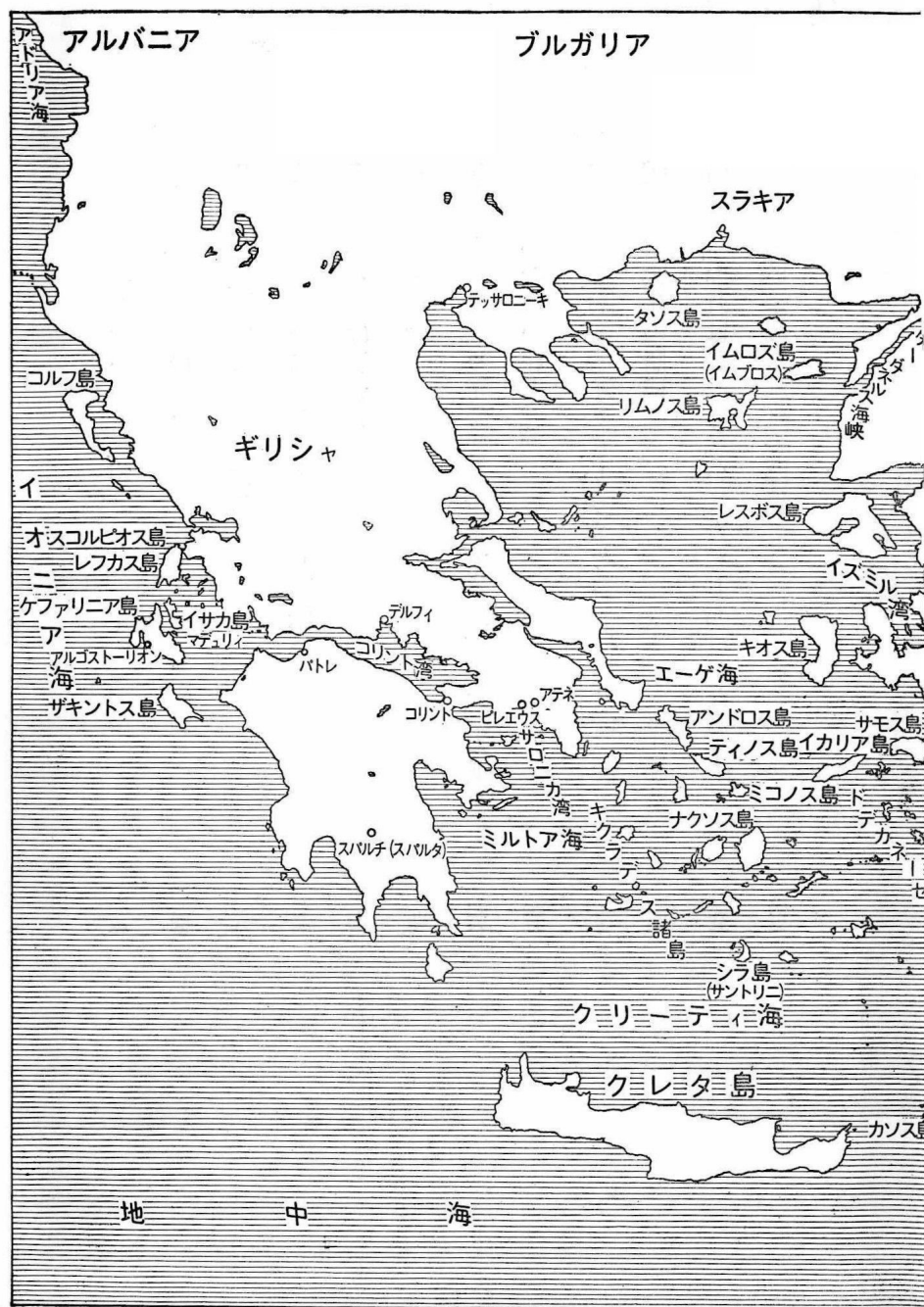
郵便番号 100
東京都千代田区霞が関1-4-2
編集電話 東京(504) 6403
販売電話 東京(504) 6515
振替口座 東京 25976

落丁・乱丁本はお取替えいたします

享有堂印刷・中西製本

0023-759010-4405





12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
追いつめられた一匹狼	「おれはなにも悪いことをしじゃない！」	南氷洋の賭博師	「彼は好奇心の強い男だ」	一七歳の花嫁を迎える	大型タンカー時代を予言する四、〇〇〇万ドル	戦火の中から生まれた船主	中古船は買いだ	一ドルの節約から体あたり商法へ	死地の中に生をかける	乱世の星のもとに	地中海をいく社長室
三三	一五	一五	一五	一七	二六	三	五	五	六	三	三

13 ペルー沖の捕鯨海戦

14 告発・中傷・ボイコットの包囲下で

15 損害賠償金は七〇〇万ドル

16 「モンテカルロと航空会社は道楽だ！」

17 チャーチルとマリア・カラスに魅せられる

18 失われた私生活

19 友情か情事か

20 ジャクリーヌ夫人の手をとって

未完のレポート

著者あとがき

参考書目

訳者あとがき

三三

三二

三〇

二九

二五

三七

三六

三〇

三〇

三九

四〇

四一

オ ナ シ ス

——七つの海の挑戦者——

第1章 地中海をいく社長室

パリのフォッシュ通りに面したアパートの五階にある広いサロンで、アリストテレス・ソクラテス・オナシスは、細長くて低いコーヒール・テーブルの近くに座を占める。目の前には書類が詰まった古い茶色の小さなアタッシェ・ケースと、いつも手もとから離れたことのない赤い皮表紙に金ばくの縁どりをしたごく小さな手帳が置いてある。ルイ一五世時代の小机の片隅では、一九五〇年ごろに撮影した色彩もゆたかな自分の肖像写真が、数年前にとった長男アレクサンデル、長女クリステイナの顔写真と向きあっている……気どりのないエレガントなたたずまい、すっかり身についたぜいたくさ、事務所を兼ねた居室。秘書もいなければ、側近の姿も見あたらないが、若いアレクサンデルが働き手の一族の者が必ず、ほど遠くないところに待機しているのだ。

彼は自ら電話にこたえる——電話はいつも鳴りっぱなしだ。愛煙家にありがちな、いささかしわがれた声でしゃべりながら、そこいらを歩き回るのである。ギリシャ語をひとことかふたこと口にしたかと思うと、すかさず軽いなまりのある、慣用句の多いフランス語に切りかえてしまう。ドアのところで、白服の執事がニューヨークからも電話がかかっていることを知らせる。フランス語はたちまち

英語にかわり、遠隔の地まで及ぶ活動力の奔流が室内に充滿して、あたかも大海原のうねりがダマスク織りの緞子^{どす}を張りつめた部屋の壁に打ち寄せるかのようだ。しかし現実には、ブローニエの森から穏やかなそよ風が吹いているにすぎない。どちらかといえば小柄で、がっしりした体格だ。いかにもがんにような頭部と鼻高のはっきりした顔だちで、はがね色がかったグレイの頭髮はふさふさとしている。そのまなざしは鋭いが、厚いまぶたの下にあるひとみは悲しそうだ。それが小さくなり、きつくなったあげくに、少年のようないたずらっぽい光がきらりとひらめくのである。生まれつきの内気な性向は、自分より六〇センチも高い相手を見下そうとする大きな態度とふつりあいな関係にある。自制するが、必ずしも十分に押えきっているとはいえない激しい気性の持ち主で、いまにも爆発しかねない。そしていったん爆発すると、その会話はまず、とぎれのない荒っぽい言葉にエスカレートしてから、ふだんの穏やかな説得調の話し方にもどるのだ。

彼はテーブルにもどって、スタッフが準備した書類に目を通す。書類は二ページ、三〇〇語たらずの簡単な報告書で数百万ドルの船を日本の造船会社に発注する条件や、資金繰りの細目、全般的な設計の特徴、配船の予定期日、また数か月にわたった複雑な交渉経過の要点などが記入されている。その日の午後、東京から到着した日本側の代表が彼を待ち受け、オナシスの提示条件を受けるか断わるか、あるいは交渉を続行するかどうか回答を行なうことになっている。「イエス」か「ノー」かを答えるためにははるばるやってきた日本人たちとの会見には、わずか三〇分の時間しか割り当てていない。すでに商談は煮詰まっているし、彼としては譲歩の余地がないのである。

その間、彼は電話でロンドンを相手にてきばきと話をつける。「君の社長が五つから四つにさげしてくれるなら『彼女』を拝見することにしよう……。」『彼女』とは、オナシス流の表現に従えば十中

八、九まで船のことである。ひとけたの数字はたいがい一〇〇万ドルの単位であり、“船を拝見する”
 といえ、自ら船を実地検分する暇はないから、船の関係書類に目を通すということになる。日本人
 の代表団が到着して、さかんにおじぎをくり返す。彼の態度も礼儀正しく、形式ばったところはない
 が、その話しぶりはいかにもユーモアにあふれ、間髪を入れずに生まれ故郷のことわざがとびだす。
 彼は話し手になるよりも、むしろ聞き手に回る。相手が見当違いな意見を吐こうものなら、いらだた
 しいそぶりを見せるが、いざ高度の政治や社会問題のゴシップになると、それほどのことではない。
 一見せっかちな性分ではなさそうだが、せかせかと動き回る傾向があつて、不眠症のものにありがち
 な落着きのない活動ぶりを思わせる。日本人との話し合いはすでに一時間をこえている——彼は自分
 でつくった時間表に縛られるような人間ではない。白い歯並みを見せて輝く笑顔。オナシスの関心は、
 日本に対して一〇隻の二〇万トン・タンカーの発注、さらにそれ以上の建造計画となつてあらわれ、
 いまや日本の造船業界にとって最大の顧客でありながら、彼は忙しくて日本を訪問することもできな
 いのである。

コートダジュールのまばゆい夏の日ざしが部屋いっぱいにあふれる。日ざしはかろうじて大きなデ
 スクをさけている。デスクの上にはポール・ゲッティ（一八九二年生まれ。アメリカの石油王。個人所得で世界一、二を争う大富豪）の『金持ちになる法』
 とロード・モラーン（チャールズの侍医）の『チャールズ』が二冊だけぽつんと置いてある。オナシスはまだ、そ
 のどちらも読んでいない。なぜなら、一年以上にわたつてモンテカルロの事業本部となつたドスタ
 ンド通りの旧スポーツ・クラブも、またモナコ公国も、最後にたずねたのは一九六六年初頭のころだ
 からである。にもかかわらず、このスポーツ・クラブにある事務所は、パリのアパートよりもずっと

オナシスにふさわしい。彼の体内を流れる血液には海水の塩気があり、事務所のガラス・ドアから見えるのは目の前の港と、それから地中海、水平線の一点にかすむコルシカ島だ。おおげさにいえば、オナシスのいないモンテカルロの風物は画竜点睛を欠いたようなものである。オナシス以外に、この壮麗な部屋を使いこなせる人物はいないという感じさえする。同じようにモンテカルロの小さな港も、むなしくあくびをしているように見えるのだ。あたりを庄するオナシス専用のヨットが、ギリシャ領内の持ち島スコロピオスに泊地を変えてしまったからである。

部屋の中には、ガラス箱におさまった船の精巧な模型が並び、なかでも他の模型よりもずぬけて大きいのは、進水時に世界最大のタンカーだったティナ・オナシス号。ほかの名高い持ち船も、それぞれ忠実に複製されている。いずれもオナシスの支配下にある一〇〇隻以上のタンカーや貨物船を代表し、その中には世界最大といわれる船もまじっている。これらの船舶群は七つの海を快速で航行しているため、彼の秘書はとつくのむかしに、部屋の一方の壁に掲げてある巨大な地図に船の現在位置を磁石で表示する作業もあきらめてしまった。金びかの額縁に納まった絵は、彼の半生におけるいくつかのハイライトを描いたものだ。ドイツの造船所で行なわれたアル・マリク・サウド・アル・アワール号の進水式、歴戦を物語る捕鯨船隊の巨大な加工船オリンピック・チャレンジャー号、その上空に舞うヘリコプターの群れ。人気のない事務所は幽霊屋敷のようで、この世のものとは思われない。しかし、いざ階下をのぞくと、忙しげに立ち働く事務員たちが現実の世界に連れもどしてくれるし、階上のフラットには、若いアレクサンデルが休日を楽しんでいる。

「オナシスはつねに最新技術の船舶を三〇〇万トンも建造してきた。彼は世界の海運界に貢献したば

かりでなく、技術的な進歩を一〇年、いや三〇年も前進させた。彼はすべて進歩向上という方向でものごとを考え、それを達成してきた。」

こう語っているのは、冷静なアメリカ人の会社顧問弁護士エリオット・ペイレンだ。ペイレンはオナシスの個人的な法律顧問であり、彼が一九五六年、子どもたちのために設立した「二、〇〇〇万ドル信託基金」の代理人である（現在、基金の実勢は数倍になっていて、オナシスは二五パーセントの受益率しか保有していない）。ニューヨーク市五番街六四七番地には、アメリカ国内におけるオナシス企業組織の本部がある。トラスト系の子会社（中南米汽船代理店、ビクトリー海運）をはじめ、オナシスが支配するギリシャのオリンピック航空支店などだが、オナシス個人は、このビルに自分の事務所を置いていないし、またニューヨークにも、もはや邸宅は構えていない。もともと、一九六七年六月（一年半ぶりだが、数週間の間に行なった二回目の訪米で）、彼はビエール・ホテルのアパートか、五番街の事務所でエリオット・ペイレンのデスクの前にある来客用の椅子か、やはり一階上にいる旧友のビクトリー海運副社長コスタ・グラツォスの部屋で過ごしている。

オナシスはこの数年来、イギリスやフランス、イタリア、スペイン、ギリシャ、ドイツ、とりわけアメリカの新聞や雑誌の一面に「謎の億万長者」「冒険商人」「黄金のギリシャ人」「新ザハロフ」（サー・バジル・ザハロフはイギリスの宣伝ぎらいな武器商人。潜水艦や飛行機のディーラー。ギリシャ人とロシア人の混血という出生があいまいな慈善家）と、根拠のない記事に断定的なレッテルをはられ、書かたてられてきたけれど、そのもの静かな威厳だけが、ゴシップの主人公と同一人物であることをしのばせている。経済記者は彼の数千万ドルにのぼる取引について、うそかまことかはしてしない推測をやめようとはしないし、またゴシップ欄のコラムニストは、彼の最も親しい友人たちと幸福な結婚生活

を送る人妻とのロマンチックな結びつきをでっちあげようとしてやまない。彼の実人生がどんなに人目を見張らせるものだったとしても、詮索好きな連中はいろいろと話を置きかえ、それにさまざまな尾ひれをつけて世間の好奇心をくすぐろうとするのだ。(とりたてて話題になる理由もないのに、その名はなにかの引きあいに出されることがある。たとえばロンドン・タイムス紙がトムソン卿に買収されたとき、イギリスの上院本会議で貴族出身の一議員が突如として、「帝国海軍をミスター・オナシスに引き渡すようなものだ」と発言している。)

逆にいえば、こうした明白な誇張は、しばしばオナシスの財政的・企業の実態の正確な規模を過小評価することになる。ペイレンは語っている。「わたしの知るかぎり、オナシスは国内であらうと、国外であらうと、そこに活動する一企業の役員ではない。彼は、オナシスの支配を許している企業体の大株主なのだ。」——五億ドルと評価される資産の支配者で、これは彼の持ち船に対する保険会社の評価額なのである。もっとも、この資産評価は一か月ごとに変動する。そしてときにはオナシスだけが正確な価額を計算できる場合もあるのだ。それはなまやさしい作業ではない。複合体の不動産や数多い系列会社、個人財産を別にすれば、海運会社だけでも約八五社が一〇か国以上に存在し、その所属タンカーはすべてオナシスの旗のもとに運航している。彼らは海に陸に空にオナシスの利益のために尽くすべく巨大な労働力を雇用しているのである。

ほかの事業センターで彼の協力者がそうするように、ペイレンはまた、オナシスあてにたえず届けられるおびただしい提案の山を細かく検討する。しかし、いつときに数件は必ずオナシス自身の裁断を必要とする。建造中の新型スーパ・タンカーとか、開発途上にある新しい航空技術(ジャンボ・ジェットやエア・バス)とか、また投資の対象となる新しいアイデアにせよ、それぞれの国情によって異

なる経済動向、政治情勢、法律問題、ビジネス慣習など、たえず調べておかなければならない。船乗りにとっては港々に女ありだが、船主たち（航空会社の経営者）にとっても、港々に問題ありというわけだ。

その意味で、一九六七年の上半期はまさに典型的なものであった。同年の一月末、ロンドンに三隻の新造船を四〇〇万ポンドで発注したが、信用状の問題でこじれたために契約を破棄している。そしてロンドンからパリにとび、モナコ最高裁判所の審理に備えるべく弁護士や関係者と協議する。レーニエ大公がモンテカルロのソシエティ・デ・バン・ド・メール会社（通称SBM）の持ち株をかってにふやしたので、オナシスは株主から少数派に転落、おこって抗告していたのである。パリからジェノバにおもむく。半分は仕事、半分はクリステイナ号で休養をとるため——最初の計画では東地中海を巡航するつもりだったが、突如としてカリブ海に変更される。

クリステイナ号でカリブ海を航行中に、モナコ最高裁判所の判決が出る。審理の結果はオナシスにとって不利である。レーニエ大公はオナシスに対して八〇〇万ドル（オナシスが請求していたのは四、〇〇〇万ドル）の支払を命ぜられるという、不利の衝撃をいくらかでもやわらげる敗北であった。その支払を待つ間、マリヤ・カラス夫人をふくむ一団とマイアミに向かい、マイアミからは空路ニューヨークへととぶ。ニューヨーク五番街にある摩天楼のひとつを買収するための交渉だ。さらに空路パリへ引き返して船舶関係の問題処理にあたり、落ち着く間もなくロンドンへ渡る。旧友であり、海運事業の共同経営者だったパナギス・ベルゴティスが持ち船アルテミッシン二世号に対するカラス夫人の権利を認めようとはしなかったので、カラス夫人とともに権利回復の訴訟を起こしたのである。（オナシスは、モナコで三、〇〇〇万ドルの損をしたがらも、悠然とカリブ海に遊んでいたが、マリヤ・カラスの

ためにはまる二週間にわたって毎日八時間ロンドンの裁判所に出廷した——このことは、オナシス独得の優先概念をよくあらわしている。週末を過ごすためにパリへ、そしてロンドンへ引き返し、またもパリに舞いもどったあと、再びニューヨークへとぶのだ。

オナシスの事業は世界をまたにかけているので、ひとところにぐずぐずしていれば、国際情勢の急変に虚をつかれるという危険を犯さないわけにはいかない。ギリシャの観光ルートで軍事クーデターが起これば、時を移さずアテネにとばなければならぬ。中東の石油庫に火の手が上がれば、巨大なタンカー船隊のオーナーはロンドンへ、ニューヨークへといそがなければならぬ。見たところ、いつも落ち着きはらい、慎重そのものだけれど、ホテルの会議室つきの続き部屋で会議に次ぐ会議である。いつときに半ダースにものぼる議題をさばくのだが、それでも会員制のクラブで西洋スゴロクの勝負を何回か楽しむ時間をひねりだし、ときには、海運業の秘密を徐々に手ほどきしている息子と語りあう時間も忘れない。ロンドンが眠っている午前三時ごろ、彼は宿舎のクラリッジ・ホテルをぬけだすと、たったひとり、帽子もかぶらずコートも着ないで、つめたい夜気にあたりながらグロウプナ広場を散歩する。それでいて翌朝は、たっぷり八時間の睡眠をとったように新鮮、活発なのである。彼は電話でパリの友人を呼びだし、あくる日の夕方にでも一杯やろうと約束するかと思えば、三日後にはニューヨークの共同経営者と昼食の約束をするといったあんなばいだ。

彼は実業界の大物たちとは違っておりまき屋を好まない（「命令を出すまで人を待機させておくのは自分の趣味にはあわない」と、彼はいう）。いつも単独で旅行し、小さな茶色のアタッシェ・ケース以外はなにも持たない。着がえの服やシャツ、靴などは行く先々にそろえてあるのだ。さまざまな国籍にわたる彼の幹部たちは、電話やテレックスを通じてひっきりなしにボスと連絡をとっている。マイアミか